

日本文学研究会

平成十九年二月

幕末の江戸語管見 ―二人称を中心に―

特任教授 小松 寿雄

J・リギンズ『英和日用句集』(1860)、ブラウン『日本語会話』(1863)、E・サトウ『会話篇』(明治6)の一人称代名詞を江戸東京語の変遷の中に位置づけた。会話篇の一人称代名詞は幕末人情本などに比べて変化がはやく、明治東京語形成に及ぼした武家教養層の影響がうかがわれる。オマエサンの衰退(アナタが唯一の最高段階対称となる)、キミ・ボクの対使用などにそれが現れている。

源氏物語若菜下巻について ―女楽の後―

教授 茅場 康雄

源氏物語の若菜上下巻は物語の頂点をかたちづくる巻といえる。なかでも下巻の女楽は大規模な場面のひとつである。その女楽の直後に、源氏と紫の上の長い対話の場面が設けられている。一日、源氏と紫の上は語り合うが、翌日の未明、紫の上は発病し物語は大きく転換する。女楽を経て発病する紫の上の内面および物語の展開を「心おく」という語に注目して探った。

平成十九年度 大学院 日本文学専攻 修士論文題目

○遠藤周作研究

○村上春樹の作品における音楽

小川 仁子
関山 真里

平成十九年度 大学院 言語教育・コミュニケーション専攻
(日本語教育) 修士論文題目

○補助動詞「てしまう」の意味と語用

○ベトナム語における受身について

金高 浩子
ゲン・チャン・ミン

○在日「こ」児童の日本語力評価方法の現状と課題

沼田佳保里

○JSL 児童のグループ活動参加の促進要素

―低学年クラスと中学年クラスを比較して―

間淵 美栄

○在日ベトナム人年少者にとつてのベトナム語の維持について

福原加代子

平成十九年度 日本語日本文学科 卒業論文題目

○谷崎潤一郎『痴人の愛』論

江口 美沙

○巻二十における防人歌―心情表現を中心に―

岡本みどり

○韓国人学習者における特殊拍生成

熊沢 慶子

○黄泉国と根ノ堅州国

高橋 美帆

○遠藤周作論―『沈黙』を中心に―

中山 友梨

○吉本ばなな論

福井 彬子

○源氏物語女性論

横田 朋佳